

保育者をめざす学生がもつ「赤ちゃんイメージ」に関する一考察 — 乳児に関わる前と関わった後の変化について —

○碓氷 ゆかり 千葉 武夫

(聖和大学短期大学部保育科)

研究目的

現代は、働く母親の産休明けからの乳児保育のニーズが高まっている。本学においては、そのような生後数週間の乳児に即対応すべく指導を行っているが、少子化や地域での付き合いの減少等の影響により、乳児との関わりは保育所での実習が初めてという学生が大半である。

そこで、ほとんど実際に乳児に関わったことのない学生の乳児に対するイメージはどのようなものか、また実際に関わることによってイメージが変化するかを調査・検討した。

方法

1. 調査対象

調査対象は、S大学短期大学部保育科1年生187名(全員女子)とした。

2. 調査方法

乳児の個人差を見る手段として、アメリカのThomas.AとChess.Sらが1956年に開始した気質に関するニューヨーク縦断研究において提唱した9つのカテゴリー(活動水準、周期の規則性、接近・退避、順応性、反応強度、敏感さ、気分の質、気の散りやすさ、注意の持続性と固執性)をもとに作成した「赤ちゃんイメージ調査票」(碓氷2001)を適用し、保育系学生がどのような「赤ちゃんイメージ」をもつかというイメージ分析を行った。

本学においては、1年次の後期に乳児クラスにおいて1回の参加実習(2003年10月～12月)を行い、公開講座時(2003年10月)に乳児の託児経験をもつことから、調査時期は、第1回目は乳児に関わる前の2003年10月に行い、2回目は学生が乳児参観や託児経験を終えた後の2003年12月に行った。また、2回目の調査時には、自分自身で赤ちゃんに対するイメージが変化したと思うかどうかについても尋ねた。

結果

調査結果は以下のようであった。

1) 第1回目と2回目の平均値の差の検定

表1. 第1回目と2回目の平均値の差の検定

項目	第1回目		第2回目		t検定
	平均	SD	平均	SD	
①活発な	2.13	0.69	2.38	0.62	-3.63**
②活きがいい	2.09	0.76	2.31	0.70	-2.97**
③すばしっこい	1.30	0.91	1.60	0.89	-3.31**
④おとなしい	0.67	0.67	0.76	0.64	-1.31
⑤規則的な	1.34	0.90	1.39	0.94	-0.52
⑥安定的な	1.12	0.85	1.14	0.81	-0.26
⑦予測しやすい	0.99	0.83	0.95	0.84	0.43
⑧好奇心が強い	2.45	0.69	2.51	0.65	-0.88
⑨ものおじしない	1.17	0.79	1.44	0.93	-3.00**
⑩人なつっこい	1.13	0.75	1.51	0.80	-4.66**
⑪順応しやすい	0.99	0.84	1.14	0.80	-1.70
⑫とけこみやすい	1.16	0.78	1.13	0.76	0.26
⑬素直な	1.95	0.94	2.21	0.78	-2.94**
⑭強い	2.42	0.72	2.39	0.67	0.41
⑮大ききな	1.65	0.92	1.53	0.97	1.17
⑯興奮しやすい	2.15	0.75	2.16	0.73	-0.01
⑰敏感な	2.32	0.66	2.29	0.71	0.28
⑱神経質な	1.53	0.78	1.27	0.85	3.13**
⑲めざとい	1.64	0.90	1.16	0.89	5.22**
⑳機嫌がいい	1.57	0.69	1.75	0.72	-2.46*
㉑愛想がいい	1.66	0.77	1.68	0.78	-0.31
㉒にこやかな	2.05	0.77	2.01	0.71	0.55
㉓気が散りやすい	1.70	0.99	1.74	0.93	-0.36
㉔あきっぽい	1.62	0.90	1.47	0.91	1.67
㉕目移りしやすい	1.97	0.85	1.93	0.79	0.63
㉖持続的な	1.18	0.85	1.27	0.70	-1.08
㉗一貫的な	1.18	0.79	1.22	0.66	-0.51
㉘しっこい	1.21	0.83	0.89	0.81	3.90**
㉙こだわりやすい	1.43	0.86	1.27	0.91	1.72

*p<.05 **p<.01

表1はそれぞれの調査の平均値の差を検定したものである。

第1回目と2回目の平均値の差をみると、「①活発な」、「②活きがいい」、「③すばしっこい」、「⑨ものおじしない」、「⑩人なつっこい」、「⑬素直な」、「⑱神経質な」、「⑲めざとい」、「㉘しっこい」の9項目が1%水準で有意差があり、「㉒機嫌がいい」が5%水準で有意差がみられた。

2) 因子分析結果

表2. 第1回目と2回目の因子分析結果

項目	第1回目			第2回目		
	第1 因子	第2 因子	第3 因子	第1 因子	第2 因子	第3 因子
①活発な	0.078	0.563	0.035	0.451	0.214	-0.029
②活きがいい	0.105	0.537	0.005	0.458	0.206	0.001
③すばしっこい	0.042	0.426	0.030	0.385	0.074	-0.015
④おとなしい	0.058	-0.297	0.075	-0.118	-0.037	0.024
⑤規則的な	-0.083	0.185	0.340	0.249	0.332	0.153
⑥安定的な	-0.078	0.186	0.367	0.264	0.289	0.098
⑦予測しやすい	-0.049	0.012	0.267	0.221	0.208	-0.029
⑧好奇心が強い	0.273	0.145	-0.135	0.246	0.296	0.006
⑨もおおじしない	0.409	0.072	-0.043	0.167	0.381	0.089
⑩人なつっこい	0.518	-0.059	-0.098	0.105	0.667	-0.083
⑪順応しやすい	0.522	-0.008	-0.106	-0.135	0.610	0.105
⑫とけこみやすい	0.667	-0.032	-0.128	-0.122	0.680	0.102
⑬素直な	0.500	0.070	-0.062	0.116	0.326	0.145
⑭強い	0.197	0.274	-0.047	0.459	0.131	0.185
⑮大げさな	0.115	0.372	0.016	0.429	0.063	0.251
⑯興奮しやすい	0.098	0.513	-0.035	0.628	0.084	0.293
⑰敏感な	0.068	0.258	0.140	0.539	0.035	0.142
⑱神経質	-0.125	0.286	0.203	0.496	-0.108	0.106
⑲めざとい	0.073	0.333	0.089	0.354	0.047	0.056
⑳機嫌がいい	0.522	0.045	0.218	0.129	0.594	-0.095
㉑愛想がいい	0.560	0.117	0.160	0.122	0.576	-0.088
㉒にこやかな	0.567	0.147	0.037	0.234	0.485	-0.019
㉓気が散りやすい	0.142	0.218	-0.511	0.203	0.072	0.701
㉔あきっぽい	0.118	0.271	-0.597	0.174	0.195	0.783
㉕目移りしやすい	0.014	0.340	-0.471	0.193	0.073	0.671
㉖持続的な	0.184	0.137	0.603	0.206	0.162	-0.334
㉗一貫的な	0.222	0.228	0.506	0.305	0.146	-0.208
㉘しつこい	-0.054	0.351	0.218	0.439	0.075	0.016
㉙こだわりやすい	-0.021	0.270	0.384	0.504	0.124	0.078
固有値	3.04	2.28	1.74	4.51	2.18	1.51
寄与率	9.05	7.78	7.54	10.79	10.45	7.04
累積寄与率	9.05	16.83	24.37	10.79	21.24	28.29

表2は因子分析結果(主因子解, varimax法)である。各因子別の因子負荷量が太字になっている項目(0.400以上)は、その因子に強い関わりを持つことを意味している。それぞれの因子を以下のように解釈した。

①第1回目の調査の解釈

第1因子は、にこにこ愛想がよく、従順で人なつっこく環境に慣れやすい乳児のイメージであり、「人なつっこい赤ちゃん」とした。第2因子は、活発で強く反応を表わす乳児のイメージであり、「快活な赤ちゃん」とした。第3因子は、あきっぽく徐々に興味が移る乳児のイメージであり、「気ままな赤ちゃん」とした。

②第2回目の調査の解釈

第1因子は、感情を強くはっきりと表わし、活発に動き回り、興味をもったことに集中しやすい乳児のイメージであり、「快活で周囲によく反応する赤ちゃん」とした。第2因子は、にこにこ機嫌がよく、人なつっこく環境に慣れやすい乳児のイメージであり、「人なつっこい赤ちゃん」とした。第3因子は、気が散りやすく徐々に興味が移る乳児のイメージであり、「気ままな赤ちゃん」とした。

考察

今回の調査から、以下のようにまとめた。

t検定の結果から、乳児の活発さ、接近性、順応性、敏感さ、気分の質、注意の持続性と固執性に関する項目において有意差がみられ、学生が実際に関わった乳児が次々に興味の向くまま活発に動きまわり、関わりに対して反応をよく返してきたことを経験したことから、乳児の活発さや人なつっこさ、慣れやすさ、気分の質において、より積極的に評価し、敏感さやこだわりについてはそれほどでもないと評価をしたと考えられる。

因子分析の結果からも、第1回目よりも、2回目のほうがよりはっきりとした乳児の意志を感じとったイメージが現れていると考えられる。

また、2回目の調査時に、自分自身の乳児に対するイメージの変化について尋ねたところ、83名(44%)の学生が「変わった」と答え、そのうち64名は乳児の個人差や能力を認め、感情表現、活動性などについてプラスイメージに変化したとみることができた。

これらのことから、学生が実際に乳児と関わることによって、様々な面を見ることができ、乳児は一人ひとり個性があり、思っていた以上に活動的で、しかもはっきりと意志をもって行動していること、非常に応答性があることを感じとったと思われる。

本学においては、2年次の5月から6月にかけて保育所で3週間の実習を行っている。また一部の学生は1年次の3月に乳児院で2週間の実習を行っている。今回、これらの実習を行う前段階としての参加実習や託児経験により、乳児に対してもっていた元気で親しみやすいイメージが、上記のようにより具体的なイメージに変化していることから、これらの経験が実際の乳児を知るきっかけになるとと思われる。今後の乳児への関わりにおいてより適切な対応ができるように、事前のオリエンテーションをどのように行うかなど、今後の指導の課題としたい。

参考文献

碓氷ゆかり 2001 保育系学生のもつ「赤ちゃんイメージ」についての分析的研究 聖和大学論集教育学系第29号A